

## 福井麻衣／咲くやこの花インタビューvol.12

福井麻衣(ふくい・まい)【平成 26 年度 音楽部門[ハープ】】



卓越した技術と音楽性により、まるで鍵盤楽器のようにハープを操り繊細かつ豊かな音色を紡ぐハーピストの福井麻衣さん。大阪に生まれ、7歳で移り住んだ北欧・スウェーデンで初めて黄金に輝くハープと対面し、「一目惚れ」。以来、指導者にも恵まれのびのびと才能を開花させてきました。18歳から6年間、パリ国立高等音楽院ハープ科及び室内楽科で研鑽を積み、2010年に同音楽院修士課程を満場一致の首席で卒業。これまでハープを松尾正代、吉野篤子、スーザン・マクドナルド、ジェルメーヌ・ロレンツィーニ、イザベル・モレッティ、ジュヌヴィエーヴ・レタングに、室内楽をミシェル・モラゲスに師事。パリ国際ハープコンクール1位受賞、第18回イスラエル国際ハープ・コンクール3位受賞ほか受賞歴多数。ファーストアルバム『ハープの宝石箱』は「レコード芸術」誌2014年8月号にて、特選盤および優秀録音に選出され、同年「咲くやこの花賞」に輝きました。国内外において、今後ますますの活躍に期待が高まる福井さんに、ハープの魅力や目標について伺いました。小柄な体から溢れ出すプラスのオーラは、清涼感のあるさわやかな笑顔や文面からも伝わるはず。自他ともに認めるマイペースぶりも楽しいインタビューとなりました。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「お好み焼き、たこ焼きがソウルフード。元気の源です！」

26年度「咲くやこの花」を受賞されました。授賞式当日は、小藪千豊(吉本新喜劇)さん、鶴澤清志郎(文楽・三味線)さんほか各分野の受賞者が顔を揃え、数々の授賞式を経験してこられた福井さんにとっても、ユニークな光景だったと思います。

受賞の知らせはフランスで受けました。当時お世話になっていたマネージャーさんからお電話をいただき、思わず電話口の前で息を呑んでしまいました。私自身スウェーデン、パリなど海外での生活が長かったこともあり、地元大阪でこのように認めて頂けたことはすごく光栄で、とても嬉しかったことを覚えています。授賞式の舞台裏では小藪さんにも声を掛けていただき、大阪市民としては嬉しかったですね。実は当時のマネージャーさんが私以上に小藪さんの大ファンで、とても興奮していたのですが、小藪さんは丁寧に対応して下さいました。小藪さんをはじめ、その道を極められている方々と肩を並べて受賞させていただけたことは、私自身未熟ながら、ものすごく自信にもつながりました。



国内外を行き来するなかで、ご自身が「大阪人やな～」と感じる瞬間はありますか。

関西の方が相手だとすぐに大阪弁が出てしまうことや、ソウルフードがお好み焼きなこと。ソース味が大好きなコテコテの大阪人なので、何かの折時にはお好みや焼き、たこ焼きを食べないと落ち着かない。自宅でも作りますし、絶対に無くてはならないものですね。フランスにもたこ焼きはあるのですが、アペタイザーのようにお皿にちよんちよんとジュエリーのように並んで出てくるので、大阪人としては「う～ん、違うな」と(笑)。私がよくするのは、関西空港内の「ぼでじゅう」で朝からモーニングセットを食べて「よし！」と気合いを入れたり、新幹線なら新大阪駅構内のたこ焼き店「くくる」には絶対立ち寄ります。自分へのご褒美とエネルギーの源ですね。

そんな生粋の関西人を自負する福井さんは、7歳で運命的な出会いを果たします。当時、お父様のお仕事の都合で渡ったスウェーデンで黄金に輝くハーブと初対面されました。

現地のインターナショナルスクールに日本人がいることは珍しかったのですが、たまたま当時通っていた学校の一学年上に日本人とイギリス人のハーブの女の子がいて、自宅に遊びに誘ってくれました。そこで、お宅のリビングに金色のハーブが置いてあるのを初めて目にして、好奇心から「やってみたい！」とすぐに思いました。スウェーデンではみんな普通に習い事をいくつか掛け持ちしていたので私も最初はピアノ、スイミング、乗馬と同じように習い事のひとつとして7歳からハーブを始めました。その後、気づけばハーブだけが残り、それが仕事になっていました。

ハーブだけはやめなかった理由とは。



一目惚れだったので、例え練習で嫌なことがあっても「やっぱり自分にはハーブしかない」と戻ってきてしまう。実はスウェーデンでもハーブを習っている人は珍しかったのですが、たまたま伺った友人宅のお母様が日本人で、その当時ヨーテボリ交響楽団のハーピストを務められていたので。私もまだ7歳で英語すら全くしゃべれない状態でしたが、手ほどきを受けられたことは幸運でした。スウェーデンは自然豊かで、受験もない。競争することなく、自由に自分のテンポでのびのびと成長させてもらえた気がします。だからなのか、すごくマイペースだねと言われるます(笑)。

(笑)。日本とスウェーデンで、教育方針の違いを感じる瞬間があったのですね。

幼稚園は大阪だったので、その頃のお母さん同士の会話を聞くと塾に通わせているとか、中学受験の話なども耳にしていたので、そういう面ではスウェーデンとは違うのかなと。どちらも良い面があるのですが、スウェーデンでは間違っちゃダメ、絶対にこれを成功させなきゃダメという教え方ではなかったのが、だから私も止めずに続けられたのかなと思います。幸い私の家族も全員性格が明るいので、悩むことも少なかったですし、それこそ「楽しかったらええやん！」と、大阪精神でずっとやってきました(笑)。

### 「曲の背景まで演奏に込める、多くを学んだパリ時代が宝物」

グランドハーブは弦が47本、ペダルが7本。アイリッシュハーブは子供でも弾ける小型の民族楽器。そして、腰にベルトで固定し、アンプにつなげて音を出す最新のエレキハーブまで。ハーブにもさまざまな種類があるのですね。



さらに、エレキハーブと対照的なバロックハーブがあります。まだペダルの仕組みがない時代、モンテヴェルディなどが使用していたバツハ以前の曲を演奏するような楽器です。弦が3列並んでいて、ピアノに例えると外側がナチュラルな白鍵、中央がシャープやフラットが出る黒鍵になります。一度パリの音楽院の卒業試験で弾いたのですが、弦が3列もあると目が散るので、最初は弦に目の焦点を合わせるのに苦労しました。いま日本のコンサートでも色々な方がバロック室内楽のプログラムを組まれているので、ブームが始まりつつあるのを感じます。私もバロック、エレキ、グランドハーブとマルチに演奏できればと思います。

なかでも一般的なグランドハーブについて、重さや大きさはどのくらいでしょう。

大きさは約 180 cm、40 kg強あります。移動はハーブ専用の台車を使い、日本には運搬専門の業者の方がいますが、ヨーロッパでは自分でワゴン車に詰め込んで、会場まで台車を引いて持ち運びます。スウェーデンでの発表会は雪が積もる季節が多かったので、雪の上に台車の轍が永遠と続いている光景を思い出します。父親に手伝ってもらいつつも子供ながらに厳しい冬の運搬を経験していたので、大人になってからは大抵の悪天候でも平気になりました(笑)。

160 cmに満たない福井さんにとっては、より大変そうな印象です。

ハーブの演奏ではペダル操作もありますし、膝に置くような感じで楽器を固定するので、椅子に座った時に膝の角度が 90 度であることが重要です。私は身長が低い分、どうしても椅子に腰かけると膝が 90 度以上に開いてしまう。それでは大きなハーブは支えきれません。舞台では 10 cmセンチのヒールをはいて、膝の角度を調整しています。10 cmのヒールで転ばずに舞台中央まで行きお辞儀をするには技術が必要なので、ウォーキングの指導も受けています。

演奏には体幹が必要なのですね。

ハーブは両手両足を使って弾くので、体幹は重要ですね。あとは、丹田をしっかりと意識すること。そこが緩むと腰を痛めて演奏ができなくなってしまう。姿勢がとても重要です。

授業などで姿勢についても学ぶのですか？

姿勢を指摘されたのは、フランスに渡ってからです。身長が低い分、下の方にある低音の弦をとる時、どうしても背中を丸めてしまう。先生方にはそこを矯正していただきました。中でも、私より小柄なベテランのロレンツィーニ先生には個人レッスンを受けていました。一見厳しいような雰囲気ですが、私たちは敬愛の意を込めて「おばあちゃん先生」と読んでいました。

ロレンツィーニ先生のプロフィール写真を拝見すると、短髪で手にはタバコというスタイルが、日本におけるハーピストのイメージとは違うかもしれません。



カッコよかったです。イタリア系フランス人で、タバコも吸われていました。残念ながら昨年他界されたのですが、ロレンツィーニ先生には単にキレイに演奏するのではなく、曲にまつわるすべてを網羅して弾くことを教わりました。

#### すべてを網羅するとは？

作曲家が育ってきた環境や曲が書かれた時代など、タイトルの背景にまで思いを巡らせなさいという教えです。例えば、ドビュッシーのソロ曲「月の光」を弾くときには、同時に彼がオーケストラのために書いた作品「海」も参考にする。左手で「ラミラミラミ…♪」と動くようなパッセージを弾くときに、単に譜面をなぞるだけではなく、「海」で感じた波のうねりや大きさを、オケや自然の力を借りてそれごと表現してごらんとか。ある時は、左右の和音をフォルテでバーンと弾くパッセージで、先生から「バスタブにヌテラ(チョコレートナッツのペースト)を一杯に満たして、その中に飛び込むような感じで」とアドバイスされました。ヌテラに包まれたときの温かみを音で表現するという発想がとても強く印象に残り、つい先日の東京公演でもそのイメージで弾いてきたばかりです(笑)。今でも新しい曲を弾く時は、「先生ならこう表現するだろうな」と考えますね。パリの音楽院の教授たちはみんな、プロとして活動することも求められていたので、先生方のストイックな背中を見て6年間勉強できたことは、かけがえのない宝物です。

**「ハープ人口を増やすのが、子供の頃からの大きな夢です」**

パリ国立高等音楽院では修士課程を首席で卒業されました。やはり学んでいる時期は、楽しいと思う瞬間が多かったのでしょうか。

パリ時代はたくさんの発見がありました。日本でも同じように先生方から多くを学びましたが、フランスでは独り暮らしですから、まず生活をどう立てていくかという所から始める必要がありました。何かあってもすぐに駆けつけてくれる家族はいない。当然、楽しいばかりの毎日とは言えず、ツライという言葉では表現しにくいのですが、1年目はとくに学ぶことが多く、実際に体調を崩した時期でもありました。

日本のインターナショナルスクールに通っていた高校2年生のときに、パリの音楽院を受験して合格されたのですね。

日本の先生方は、将来ハープをやるにしても人生どう転ぶか分からないから、高校の卒業証明書だけはおいておいた方がいいと心配してくださり、通信教育に対応してくれました。そのためパリでの1年目は、日本の高校3年生としても通信教育を受けていたのでとても大変でした。加えて、フランス語を一から学び、パリでの独り暮らしにも慣れていかなければならない。身内の不幸も重なり、体重も減ってと、いま振り返ると、あれ以上人生において苦しいことはないだろうなという時期を過ごしました。



10代にして、言葉以上に大変なご経験をされたのですね。

それでも、3年も経てばハープ科のみんなが交わすジョークにも理解して笑えるようになっていました。フランスはルールはありながらも個人を尊重してくれる教育なので、クラス内で切磋琢磨したり、「あなたはハープを通してどう人生を過ごしていきたいの？」と常に問われました。将来オーケストラをやりたいからこれを極めたいという同級生がいたり、私はコンクールを受けたいと意向を伝え、尊重していただきました。卒業試験ではハープのテクニクに加え、企画力と音楽性が求められたので、1年半かけて企画を練り上げました。

演奏技術だけではなく、総合力が重視されたのですね。

プロデュース力が求められました。そのためダンサーを呼んだり、照明さんとプランを相談したり、考えた台詞を自分でしゃべって演奏もして、早替えにも挑戦しました。今考えると社会に出て経験するようなことをいち早く味わうことができたのかなと。実践とともに論文も提出し、お陰さまで首席で卒業させていただきました。

楽器によっては1日練習を休むと感覚が鈍るものもあるそうですが、ハープの場合はいかがでしょう。

ハープは小指以外の指先を使って弦を弾くため、指先にマメが出来るのが特徴です。数日でも練習を怠るとマメが柔らかくなり、その状況で急激に練習すると指先が水ぶくれになり、酷いときは血豆になります。それを避けるためにも、日々の努力は欠かせません。マメは硬すぎると「ペン」と乾いた音がするし、「ポーン」と柔らかい音を出すためには、ある程度の柔らかさも必要です。そのため、ハーピストは目の細かいヤスリで優しくマメを研いでベストな固さに調整します。とはいえ、あまりにも神経質になりすぎると長続きしないので。私の場合、何事も「仕方ないね～」と思える余裕を持つことが大事かなと思っています(笑)。

練習、本番、道具の手入れ、まったくハープに関わらない時間など、どんな瞬間が一番好きですか。

基本的に人生はどの瞬間も楽しいですね。根がポジティブなので、例えツライことがあっても、ハープの後ろに座ると安心して癒されている自分に気づきます。

ハープという楽器に男性性や女性性を感じたことはありますか？





考えたこともなかったですね。あまりにも小さい頃から家にあっただので、空気みたいな存在でしょうか。思い返せば、すごく助けられてきたなという印象です。私はいつも笑顔のイメージを持たれがちですが、ツライときはワッと泣いてサッと忘れるタイプです(笑)。小さい頃は、思ったようにパッセージが弾けないことが悔しくて、よくぐちゃぐちゃに泣きながら練習していました。すると、涙の滴でサウンドボードが濡れて「あー！」となったり。すぐに拭うんですけど、小さい頃に使っていたハーブには、何となく涙の後が残っていますね。今使っているハーブにはそんな思いはさせないであげようと、今思いました(笑)。

過去のインタビューにある、「ハーブに可能性を感じ、自分にも限界を作りたくない」とのコメントが印象的です。14年から短期間、フランスのアミアン地方音楽院で非常勤講師に就き、指導者としても経験を積まれました。最後に、いま思い描く身近な目標や、大きな夢があればお聞かせください。

限界がないとの思いを込めて、「アンリミティッド」と題したリサイタルを、これまで大阪と京都で開催してきました。ザ・フェニックスホールでは、グランドハーブやエレキを使ったソロ、サクソとのデュオなど2時間たっぷりハーブの魅力を知っていただきました。昨年の京都・青山音楽記念会館バロックザールでは「オペラ・アンリミティッド」と題し2回目を開催することができました。今後も「アンリミティッド」シリーズは続けていきたいです。また、ハーブ人口を増やすことは子供の頃からの大きな夢です。そのためにも後進を育て、その子たちを通して多くの方にハーブを広めていきたい。そんなプロジェクトも計画していきたいですね。

夢が広がりますね。

アーティストとしては、クラシック界に軸足を置きつつもポップス、ジャズなど異なるジャンルの文化ともオープンに交流し、常にお客様を飽きさせない存在でいるべきかなと思います。私はミュージカルを観に行くことが多く、フランスにいた頃は、ユーロスターでロンドンへ行き、友人宅へ泊めてもらいながら2、3日は昼も夜も芝居を観て過ごすことがありました。『オリバー・ツイスト』『ライオンキング』『美女と野獣』『オペラ座の怪人』『アラジン』『チャーリーとチョコレート工場』『マンマ・ミーア!』など、同じ作品をリピートしたり。舞台での演者の佇まいや小道具ひとつにしても、自分のコンサートに活かせる部分はないかと楽しみながら観ていました。少しでもアイデアを実現できたら、それが宣伝文句となり、お客様も足が運びやすいと思うので。「ちょっと違うから、行ってみようかな」という気持ちは大事にしたい。コンサートはお客様の貴重な時間をお借りすることでもあるので、これからも様々な場所で、自分のベストを尽くしていきたいと思います。



#### ★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】……

先日、伝統芸能の世界に携わる同世代の女性と知り合う機会に恵まれました。関西伝統芸能女流振興会の代表理事でいらっしゃる向平美希さんという方です。子育てしながらとてもパワフルに活動されていて、その時は、舞台を五感で楽しんでいただこうと香りの演出も取り入れていると伺い、研究熱心な姿勢に非常に感銘を受けました。どんなジャンルでもその道を極められている方は、良い影響を得られる存在だと思います。

